

地域情報（県別）

【京都】医師会独自のプラットフォームで情報発信、全国で読まれる記事も-堀田祐馬・京都府医師会理事に聞く◆Vol.3

京都府医師会制作「妊娠に際し職場のみんなで読むマニュアル」は38万人が閲覧

2025年12月22日（月）配信 m3.com地域版

京都府医師会で若手医師への支援活動を行う「屋根瓦ワーキングチーム」は教育だけでなく、情報発信も担う。医師が編集部員となって府内各地の医師を紹介する情報誌「Arzt」を発行し、医師会独自のプラットフォーム「KMA.com」にコンテンツを提供。堀田祐馬理事らが企画・作成した妊娠関連のマニュアルは各地の医師会や学会、医療機関のサイトでも紹介され、現在までに約38万人が閲覧したという。堀田氏に今後の展望を含めて聞いた。（2025年11月4日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



堀田祐馬氏（本人提供）

「医師会とつながれるツールを」会長肝いりの事業が稼働

——若手医師の支援活動を行う「屋根瓦ワーキングチーム」は教育だけでなく、情報発信も担っています。その一つに医師会発行の情報誌「Arzt（アルツト）」があります。

Arztは2017年から定期発行しており、現在までに20号を数えます。ドイツ語で「医師」を意味することが命名の由来です。元々、京都府医師会が主動していた事業ですが、「より若手医師の目線を生かそう」と屋根瓦ワーキングチームに依頼があり、現在はメンバー3～4人が編集部員となって制作に携わっています。府内各地の研修医や専攻医、指導医を取材してさまざまな医師のキャリアや価値観、考えを発信していることが特徴です。冊子は京都府医師会の会員や臨床研修屋根瓦塾KYOTOの参加者に配布されており、ウェブでも全てのバックナンバーを読むことができます。

——情報発信としては、2023年から運営するプラットフォーム「KMA.com」も挙げられます。医師会が多様なコンテンツを提供するウェブ媒体を持つのは全国的にも珍しいと思います。

KMA.comは松井道宣会長肝いりの取り組みで、医師が京都府医師会とつながりやすくするツールをつくりたい思いから開設されました。研修医などの若手医師に向けてさまざまな情報をテキストや動画で発信しています。「明日から使える鑑別診断」などをテーマとしたショート動画や学術講演会の動画配信、勉強会や講演会、ワークショップなどのイベント情報に、医師賠償責任保険や融資あっせんなどの生活支援情報も掲載されています。勤務医、研修医、医学生であれば大学や勤務地は問わず誰でも登録可能で、入会金や会費は無料です。

屋根瓦ワーキングチームはこのプラットフォームにコンテンツを提供しています。臨床研修屋根瓦塾KYOTOの様様やRe-1グランプリのプレゼンの動画などを載せていただいています。

妊娠関連マニュアルも重視したのは「当事者目線」

——KMA.comには「ワークライフバランス」をテーマにしたコンテンツもあります。その中の「妊娠に際し職場のみんなで読むマニュアル」は多くの人に読まれているそうですね。

このマニュアルは京都府医師会のワークライフバランス委員会が中心となって制作したもので、私は同委員会の責任者の一人です。企画の発端は、私がある後輩の女性医師から受けた相談にあります。「妊娠しているので放射線を扱う仕事や当直は避けたいです。でも、まだ安定期ではないので職場の人には言いたくない。どうすればいいのでしょうか……」。仕事を一時的に制限したいものの、妊娠しているとは知られたくない、といった難しいシチュエーションがあることを知り、「これは情報を整理して広く伝えた方が良いのでは」と考えました。私たち医師は医療の専門職ではありますが、女性医師の妊娠・出産に伴う苦勞への理解が十分とは言えず、性別や世代、役職間での分断が起きている状況も課題だと考えました。

コンテンツ制作に当たっては医師会の予算をいただき、私を含め4人のメンバーで企画しました。「マニュアル」と題してはいますが、専門家の意見を交えつつ、「女性医師の妊活体験記」や「男性医師が経験した妻の出産と男性育児」などといったように、当事者目線を重視し、ブログのような読み物の体裁となっています。妊活から出産、育児休業、職場復帰、子育ての悩みなど各フェーズで考えてほしい、知ってほしいことを当事者である医師の感想やメッセージを織り交ぜながら掲載しています。

同マニュアルはKMA.comに掲載していただいているほか、ウェブサイトにして一般の人でも読めるようにしています。2022年から少しずつ記事を増やしており、最後の第12章が2025年12月中旬に公開される予定です。各地の医師会や学会、医療機関のサイトなどで紹介されているほか、一般読者も増えており、現在までにおよそ38万人に閲覧されています。Googleで「妊娠に際し」と検索すると、一番目に表示されます。

——改めて、堀田先生が行ってきた多様な活動のモチベーションを聞きたいです。それは、取材の冒頭で言われた「課題解決が趣味」ですか。

そうですね。自分が置かれた場所で何らかの課題を見つけ、仲間を増やしながらシステムをつくり、解決していくこと。自分がいなくなっても回っていく仕組みをつくっていくのがすごく気持ちいいんです。医師会だけでなく、病院の職場でも家庭でも同じような動きをしています。妻からは苦笑されることもありますが（笑）。

私がここまで自由にスピード感を持って活動できたのは、医師会の先輩方に支えられてきたことも大きいです。中でも、私が医師会で活動するきっかけをくれた上田朋宏副会長にはさまざまな場面で助けていただきました。活動初期にベテランの先生と意見が食い違った際もうまく収めてくださって。上田先生のユニークな発案を私が具現化し、最終的に先生が責任を持ってくださる——という相補的な関係を築けたことにより、医師会内外でのハレーションを恐れることなく、課題解決にまい進できたのだと思います。

そして何より、事業を継続させるための基盤をつくってくださったのが松井会長です。松井先生が明確なビジョンを持って強いリーダーシップを発揮し、行政と信頼関係を築いてくださったこと、財政・制度的支援を得るために調整を図っていただいたことにより、私たちは活動を続けられています。

2026年の総合オリエンに府内の全臨床研修指定病院が参加

——最後に、今後の展望をお聞かせください。

現在は、医師会との関係性が乏しかった病院の先生方や行政の職員、政治家の方などとお会いして意見交換を行い、顔の見える関係をつくることに努めています。具体的には、松原先生と2人で月に1回、「京都医政塾」と題してさまざまな方にお目にかかっています。ちょうど、立場的に次世代の京都の医療の中心を担うであろう方々の多くが私と同年代なので、その病院や地域の課題を聞いたり、行政で活躍されている方や大学関連で地域医療に尽力されている先生方と医師少数区域の医療をテーマに語り合ったりしています。

医政塾と聞くと形式ばった印象を抱くかもしれませんが、ざっくばらんな飲み会です。公の場では互いに言いづらい本音を交えて意見交換したいんですね。京都府医師会では毎年春に京都府内の新臨床研修医向けの総合オリエンテーションを開いており、200人ほどの研修医が受講してくれていますが、2025年までは病院が行う独自の研修がある関係で出席していただけない施設がありました。それが、医政塾を通して各地の病院と関係を築くことにより、2026年春には府内全ての臨床研修指定病院の出席が決まりました。これは、私たちが行ってきた活動の一つの成果だと思います。

いろいろな人と交流することにより、自分が思いもよらなかったポジティブな結果をもたらすこと。過去にはつながらなかった点と点をつなげていくことを今後も意識して、引き続き、楽しみながら活動を続けたいです。

◆堀田 祐馬（ほった・ゆうま）氏

2008年京都府立医科大学卒。市立福知山市民病院に研修医として勤務した後、松下記念病院消化器内科医長を経て2021年に京都第二赤十字病院に入職、2022年から同院消化器内科医長。京都府医師会では2021年から理事を務める。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

